

富士吉田あれこれ

富士の迷水

富士北麓は、富士五湖に代表されるように古来より水豊かな地域として、また、良質の湧水群を持つ名水の産地としてもよく知られている地域です。湖を形成する水源は湖底から湧き出す富士山の地下水です。湖のみならずこの地域には大小合わせて幾つもの水源があります。有名なところでは、名水百選に選定されている「忍野八海」(忍野村)や、富士吉田市の水源の一つでもある「せんすい泉水」があげられます。富士山に降った雨(雪)水は、地面を流下する表流水以外は通常、地下に浸透していきます。この地域に特徴的な火山砂礫や溶岩台地は水を地下に浸透させやすい地質です。富士北麓の地下水は、2~30年、あるいは数十年という歳月を経て湧出しているといわれています。また、富士北麓の年間地下水浸透量は1億tというもので、そのうち現在使用されている地下水量は約2千万tといわれています。[田中収1995]

富士山が育む豊かな水のおかげ

で水不足の心配も少なく、安定したおいしい水を私達の生活に提供してくれる富士山ですが、その恩恵とは裏腹に水による災害もあります。五湖のうち、山中湖だけは自然の流出口(桂川)をもつ湖ですが、他の四湖は元来、水のはけ口を持たない堰止湖でした。そのため、大雨などによって異常増水し、災害となるケースもあります。昭和58年(1983)河口湖、平成3年(1991)西湖の異常増水は記憶に新しいところです。

さて、この豊かな水ですが、私達の生活にとりわけ欠かせないのは飲用水としての利用です。富士吉田市の上水道の水源は、現在20箇所あり、ほとんどが地下100mから汲み上げた地下水です。そのなかで水源の一つとなっている「泉水」(泉端 仙水 仙端とも表記)は、源頼朝が富士北麓で巻狩りを行なった際に、喉の渇きを癒すため、神仏に祈りつつ大地に矢を突きたてたところ、そこから水が湧き出したという故事が残されているところで、

江戸時代には富士山信仰の「富士八海」の一つに数えられた禊をすすめる重要な場でもありました。ここは現在でも水を汲むことができるため、おいしい水を求める人が訪れていますが、場所がわかりづらいようで度々問い合わせがあります。

我が国では水道の普及率も高く、安価で直接飲用できる水道水が供給されていますが、ミネラルウォーターの消費量の増大や家庭用浄水器の普及などをみると、安全でよりおいしい水を求める意識が高まっているといえます。そのせいか、吉田周辺でも地元を含め他地域から多くの人々が、富士山麓にこのおいしい水を求めてやってきます。最近では、この地域の水に糖尿病に効果がある(?)といわれるバナジウムが、より多く含まれているとされ、人気にいつそうの拍車がかかっています。また、名物「吉田のうどん」には、この水が欠かせないともいわれています。また、富士の名を冠したミネラ

ルウォーターも数種類販売されていることからその人気の高さがうかがえます。

富士山麓のおいしい水を求める人は後を絶ちません。市内でも水が汲めるところでは多くの人で賑わっているようです。しかしながら実際のところ、これらの水は基本的に水源から汲み上げられているものであり、水道水として飲用されている水と変わりはありません。どこで汲んでも飲んでおいしい水ですが、雰囲気も手伝ってか水汲み場では、ポリタンクを持った人の行列をよく見かけます。また、どの水が一番おいしいのか、どこに行ったら汲めるのか、探し迷う人も多いようです。

富士山からの恵みであるおいしい水を迷い探さずとも普段から飲む吉田の人はとても幸せなのかもしれません。

(布施光敏)

参考文献

●『富士吉田景観野外博物館ランド』
田中収編著 1995 富士吉田市



■「道の駅 富士吉田」の水汲み場

吉田の富士山御師

—平成17年度 外川家住宅学術調査経過報告—

はじめに

外川家（塩屋）は上吉田の中宿と下宿の境にある、御師業（富士登山の宿兼富士山の神職）を営んでいたお宅です。この外川家は主屋が江戸中期、離れが明治時代の建物で、平成16年11月11日に富士吉田市の文化財に指定されました。

市では、この外川家を市の財産として有効に保存・活用していくため、平成17年～平成19年にかけて、専門家で組織された外川家住宅学術調査会（以下調査会とする）を発足し学術調査に取り組んでいくこととなりました。

調査会は、建造物・石造物・古文書・民具・民俗の5つの分野の専門家で組織され、総勢13名の調査員が、調査にあたっています。平成17年度はそれぞれ数回にわたって市内で調査員が現地調査を実施しました。調査成果は最終年度に、報告書にまとめられる予定ですが、今回はその途中経過を紹介いたします。



■タツミチからみた外川家の外観

外川家調査以前の経過

外川家は以前、富士吉田市史編纂事業で調査を実施しており、その成果は『上吉田の民俗』（富士吉田市 1989年）に報告されています。

御師業は今から40年ほど前にはやめており、今では講社が宿泊することはありません。しかし、離れの御神殿には、食行身祿の木像、

版木や奉納額、供物などの工芸品が置かれており、宿泊した講社のドテラや浴衣などの寝具、名前入りの食器も残されていました。

文化財指定に先立ち、調査された主屋では、建物が造られた時の棟札が発見され、その年紀から、主屋が明和5年(1768)頃に建てられたものであると考えられています。



■外川家離れにある御神殿

吉田の富士山御師

—平成17年度 外川家住宅学術調査経過報告—

学術調査の実施

平成18年度には、建物を修理工事するため、建物内に立ち入ることができなくなります。調査会ではすべての分野で、平成17年度中に建物内の調査を終えなければなりません。特に、民具と古文書はぼう大な点数があり、それらをすべて運びだすのには、夏の時期の多くの日数を費やしました。資料は現在、博物館で保管し、整理を行っています。

また、資料は、普段使われてい

ない屋根裏部屋にも積まれていました。調査員が屋根裏に上り、木箱などを持ち上げると、長年の間に蓄積したほこりか粉雪のように舞い上がります。屋根裏では調査員は防塵マスク着用の重装備で、調査に臨みました。

資料搬出の喧騒が終わり、秋になって、建造物の分野で4日間、石造物の分野で2日間、調査員が調査を行いました。



■屋根裏の梁を歩く調査員

屋根裏の発見

資料搬出中には、学術的に興味深い発見もありました。調査員が主屋の屋根裏に上り、梁の間を渡っていくと、神棚が設置されている上方の柱に、木の札が何枚か打ち付けてあるのを確認することができました。まだ詳細は確認していませんが、調

査員の推測ではこの木札は呪術的な意味があり、「建築儀礼」とよばれる儀式の一端であると考えられます。建築儀礼は建造物を建てるいくつかの過程で行う儀式で、それによって工事の安全や家の安泰、災い除けを願うものです。この付近では明和5年の銘の入った

棟札も見つかっています。また、コモに包まれた大量の古い紙のお札も見つかりました。古くなったお札ですが、大事なものなので捨てられず、この場所に安置してあったものと推測されます。



■コモに包まれていた古いお札の束



■屋根裏の柱の4枚の木札

ご先祖さまのお引越し

平成17年9月25日、民具や古文書が運び出され、がらんとした主屋から、霊神さん（先祖の霊）が運び出される儀式が行われました。霊神さんは、霊璽という位牌にあたるものに、お祀りされています。

この日はその霊璽が収められた棚の前に、たくさんの供物が並べられ、さらにその前には外川家の方々がそろって儀式に参加しました。

儀式を司るのは富士山五合目にある小御嶽神社の神主です。礼をして後、櫛を振って霊前や室内を清め、祝詞を奏上しました。その後、外川家関係の方で棚前にお

参りし、ご先祖の霊に手をあわせました。儀式が終えて、霊璽や壁にかけられていたご先祖の肖像写真などは取り外され、別の家に移動されました。

こうして無事、儀式は終わりましたが、留守宅を守のご先祖さまがいなくなった分、市ではさらに責任をもってこの家を保存していくなくてはならないでしょう。



■取りだされた霊璽



■小御嶽神社の神主による祝詞の奏上



■最後にご朱印を押して完成

■並べられたお札。千葉の講社に送られる。

お札刷り

12月、塩屋外川家の御師業の一部を引き継いでいる御師の「竹谷」に、千葉県市原市にある講社の方から富士山のお札を送ってほしいという依頼の手紙が届きました。このお札は毎年12月に外川家に代わって刷り、千葉県の講社に送っているもので、最後に押される朱印などは外川家に伝わっているものを使用します。

御師と講社はお寺と檀家の関係と同じです。竹谷も御師の家系で、血縁である外川家という御師の檀家の一部をひきついで、お札刷りを続けているのです。

外川家に関わりのある講社の多くは、このお札の送り先である千葉県市原市周辺にあったようです。そのため民具の調査では、マネギやドテラに染め抜かれた文字に、五井町など市原市内の地名がたくさん登場しています。

吉田の富士山御師

ー平成17年度 外川家住宅学術調査経過報告ー

外川家の建築に関する文字資料

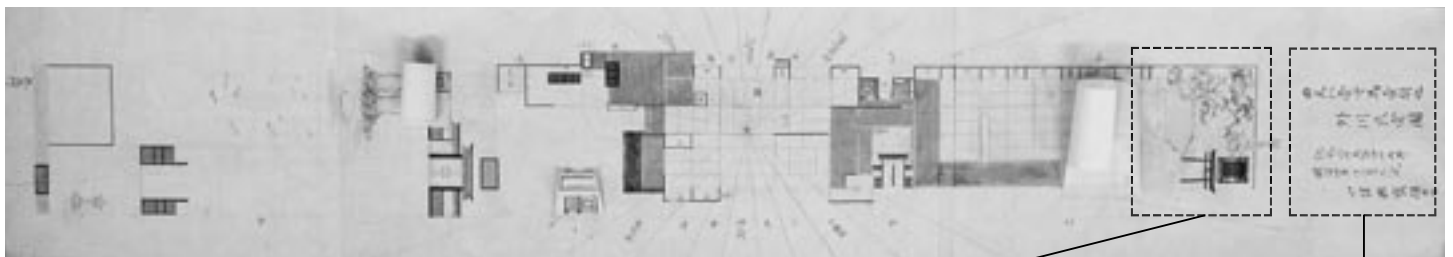
外川家の古文書は、平成17年の7・8月、食器や寝具などの民具と一緒に建物内から運びだされ、調

査員の手によって博物館での整理作業を行ってきました。整理作業は、箱などに入っている古文書を分け、中性紙の封筒に入れ、表題や年代、内容などを封筒の表面に記していく地道な作業です。当初

それほど点数がないと思われていた古文書でしたが、現在整理が終わったものだけで700点あまり、最終的には約2000点にものぼるようです。

今年度には、すでにいくつかの

重要な史料が発見されていますが、特に建物に関して、江戸時代の主屋の普請帳「家作萬覚帳」と明治時代の離れの増築に関わる「家相図」が見つかっています。

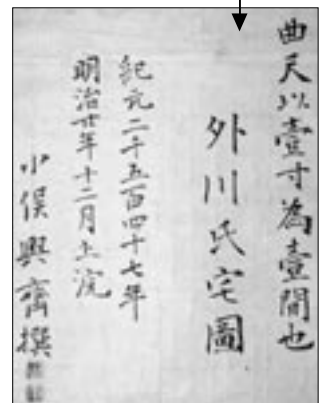


■明治の間取り図全体(家相図)



■裏庭部分拡大
池の周りに松が配された
庭園風の裏庭

■家相図の右端には
「明治廿(20)年十二月上浣」
と年紀があります。

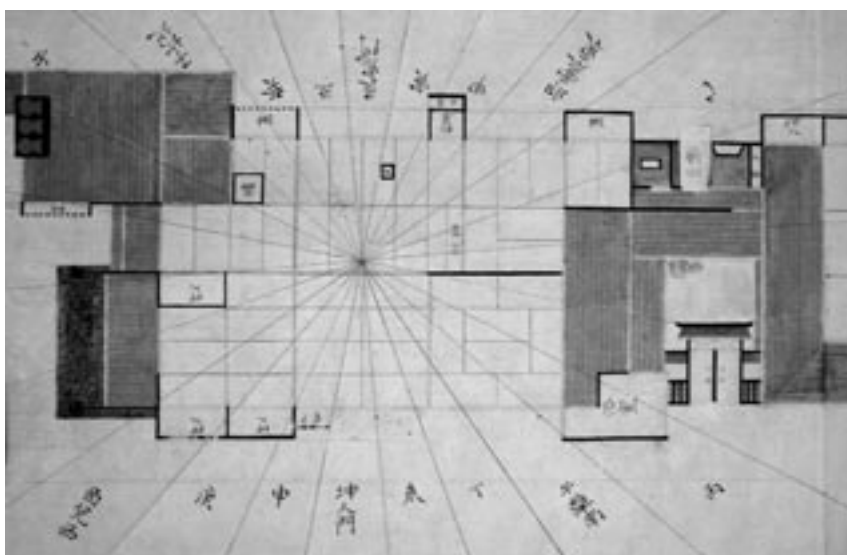


明治時代・離れの増築

外川家は現在、上吉田の町割に特有の、東西に細長い敷地で、主屋と離れの2棟が並び建っており、渡り廊下でつながっています。上の資料は、明治20年(1887)の家相図で、方角による間取りの吉凶を占ったものですが、今と同じ家屋の配置となっています。この家相図が書かれたのと前後する時期に、離れが増築され、現在に至っていると考えられます。

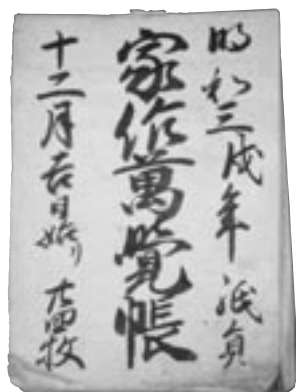
■主屋部分拡大図

入念に方位を調べ、吉凶を占っています。この結果によると、残念ながら渡り廊下の廁(トイレ)だけは「凶」の様。押入れや棚の位置まで詳細に記しています

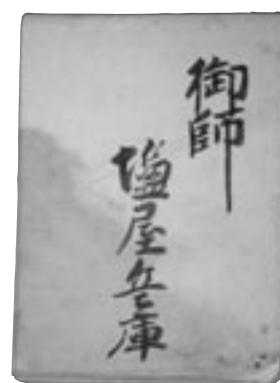




■明和五年の棟札
明和五歳子 今月今日 祠官 小佐野官治

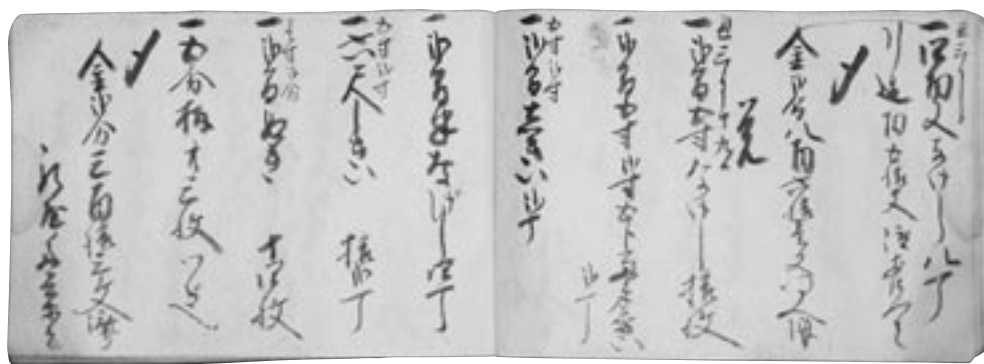


(表紙) 明和三年祇貞
家作萬覚帳
十二月吉日始り 廿四枚



(裏表紙) 御師
塩屋兵庫

■明和3年の「家作萬覚帳」 表紙(左)と裏表紙(右)



■「家作萬覚帳」の文面。「しきい」・「なげし」・「ぬき」などの部材があげられている。

江戸時代 主屋の普請資料

建造物分野の調査報告では先述のとおり、主屋の屋根裏から明和5年(1768)の年記のある棟札が見つかり、主屋の建築年が推定できましたが、さらに、古文書の調査によってその2年前の明和3年の年紀のある「家作萬覚帳」が発見され、主屋の建築年代に更なる根拠を加え、当初の間取りや規模といった普請の詳細を明らかにできる可能性が高くなってきました。このような状況下、建造物分野では、詳細な建物の図面作成のため、秋に2回の現地調査に入りました。

この時の調査で、主屋について

は、当初の建物に、何回かの増改築が加わっていることがわかりました。普請の当初に遡る建築部材が残っているかはまだ不明ですが、上吉田の御師の家屋が、幕末の御師の住宅である小佐野家のように、規模の大きな宿に発展していく過程を探る上で、貴重な建築資料となることは確かなようです。特に、離れが増築される以前に主屋にご神前があったのか、あったとしたらどこに置かれていたのかということは、興味深い問題です。

来年度からの外川家住宅学術調査

平成18年度も引き続き外川家の学術調査を行っていきます。建造物・石造物・古文書・民具は今年度の成果をもとに、更なる詳細な調査を進めていきます。

また、今年度富士吉田市内での調査で、基礎的な情報を集めた民俗分野の調査では、外川家と関わりの深い講社が多くあった千葉県市原市へ赴き、更なる調査を行う予定です。

今年度・来年度の調査成果は各分野ごとにまとめられ、平成19年度以降に学術調査報告書として刊行される予定です。乞うご期待ください。
(高橋晶子)

吉田の富士山御師

—平成17年度 外川家住宅学術調査経過報告—

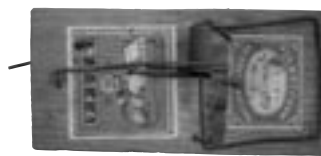
こんなものがありました

外川家にあった家族生活・御師業の道具類の数々。まだまだ整理中。こんなものもありました。



●『富士名木の箸』

お土産品なのでしょうか。



●『ばね式のネズミとり』



●『七番の札』

なんとなく幸運？



●『洗米機』

取っ手を回せば簡単に米がとげます。



●『金剛杖たて』

傘たてではない。



●『マネギ』

千葉県講社のもの



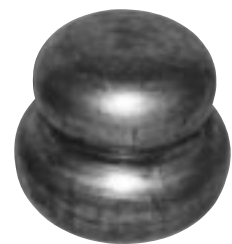
●『千社札模様の浴衣』

実在する人たちの名前でしょうか。



●『名前、用途不明』

鉄製。
誰か、何なのか
教えて下さい。



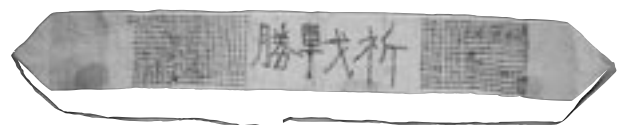
●『金のお供え餅』

木製。
大きさ 径305×高275mm



●『かえるの置物』

足の裏に「鎮」の文字。
何かを鎮めている？



●『千人針』

無事な帰りを願って。

Information

博物館からのお知らせ

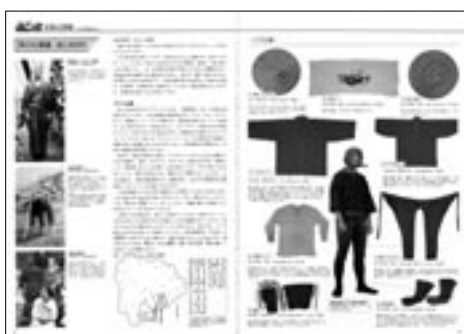
企画展 『仕事と仕事着』

平成18年2月1日(水)～5月28日(日)

仕事着は各種の労働に使われる着物のことで、畑仕事に使う作業着も含まれます。特に、富士吉田市は富士山の北麓に位置し、耕作される土地は海拔が高く、そのためか、田畑のことを「ヤマ」とよんだり、耕作に行くことを「ヤマに行く」と表現したりします。そして農作業に用いられる服をヤマギ(山着)ともよんでいました。

展示では、富士山の北麓地域の農作

業着の作例を集め、その特性を比べてみたいと考えました。また、海拔の高い地域に残っている、木綿以外の藤・麻・楮などの素材による農作業着の例やその分布にも注目しました。それにより、過去のものになりつつある富士吉田周辺の仕事着の実態を少しでも明らかにし、富士山の山麓地域の衣生活の特性を、わかりやすく伝えたいと考えています。



MARUBI 26 編集後記

父家の東京を離れて早や10余年。たまに帰省して感じること、それは水の違いです。「不味い」といったら語弊がありますが、明らかに味、匂い、温度差を感じてなりません。吉田ではおいしい水で生活できる反面、ミネラル分が多いせいか、胃腸に幾つかの行を抱えるようになり、生みの苦しみを味わった経験もあります。無論、これだけが原因ではなく、水のせいにしては申し訳ありませんが、この水はどうやら私の体には合わないようです。独特の風味あるあの水は水を体が欲している今日この頃です。(F.U.)

平成17年度博物館実習

博物館実習カリキュラム

日	項目	内容
1日目	オリエンテーション	諸注意等/館内見学
	博物館概要説明	施設運営・財務/事業紹介
2日目	館外実習(施設見学)	付属施設/レーダードーム館
	受付/レファレンス	受付業務/観覧者対応
3日目	体験学習準備	縄文土器作り教室準備等
4日目	館外実習	裾野市富士山資料館
5日目	資料の扱い方Ⅰ	民俗資料の実測/写真撮影
6日目	資料の扱い方Ⅱ	受入と所蔵
7日目	資料の扱い方Ⅲ	受入と所蔵2
8日目	体験学習実施	縄文土器作り教室実施
9日目	館外実習	民俗資料調査
10日目	館外実習	民俗資料調査
11日目	館外実習(施設見学)	都留市博物館
12日目	実習総括	

7月29日～8月11日の約2週間、3名の博物館実習生が学芸員資格習得のために学んでいきました。



富士吉田市歴史民俗博物館

FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間/午前9:30～午後5:00 (午後4:30迄入館可)

休館日/年末年始

観覧料/大人 300円(団体240円) 団体割引は20名以上に適用
小中高生 150円(団体120円)

交通案内/●中央自動車道河口湖ICより車で10分
●東富士五湖道路山中湖ICより車で10分
●富士急行線富士吉田駅より山中湖方面バス15分、サンパークふじ下車



タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地一帯を指すこの地方のこと「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものといわれています。

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田2288-1 TEL 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665

博物館ホームページ URL ●http://www.city.fujiyoshida.yamanashi.jp/div/hakubutsu/html/ E-mail ●hakubutsu@city.fujiyoshida.lg.jp

2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403-0005 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

発行/平成18年3月31日 印刷/K2・ONE